

天龍山石窟北齊窟に関する一考察

神谷麻理子

A Consideration on the Northern Qi Caves of Tian Long Shan Grottoes

KAMIYA Mariko

Tianlongshan Grottoes is a Buddhist Cave temple located on the outskirts of Tai Yuan City in Shanxi Province, China. It has been well known all over the world for its excellent group of Buddha statues since it is discovered in the early 20th Century. From the east peak to the west peak, there are a total of twenty four caves which are numbered one to twenty one. The Grottoes were likely initially constructed during the Eastern Wei Dynasty (6th Century) and the area seems to have entered into the height of its prosperity during the Tang Dynasty. It is probable that the first, tenth and sixteenth caves were built during the Northern Qi Dynasty and it is possible that they were built in the secondary stage of building. However it is difficult to judge because the styles of these three caves are not all the same and the difference is especially pronounced with respect to the first cave.

In this article we will focus on these three caves built in Northern Qi Dynasty and estimate when they were built and examine the significance of Northern Qi Dynasty in Tianlongshan Grottoes.

二十世紀の初頭、中国山西省太原市郊外で天龍山石窟が再発見され、世にその存在が知られるようになってから、九十年近くになろうとしている。仏教石窟寺院として開鑿が始まった天龍山石窟では、唐代に最盛期を迎え、「天龍山様式」と称されるほど、優美で柔らかな仏像彫刻が生み出された。東魏、乃至は北齊初期の造営にあたる第二窟・第三窟を第一期と見なした場合、通常北齊と考えられている第一窟、第十窟、第十六窟は第二期、及び隋の第八窟は第三期の造営といえることができる。その内、第八窟は天龍山石窟中唯一の紀年銘をもつため、造営年代に異論はないが、北齊窟については必ずしも見解が一致しているわけではなく、諸窟の前後関係も明らかとはいえない。

創建については文献史料が乏しいため、様式研究を中心とせざるを得ないのだが、石窟の再発見以後、盗難による破壊が著しく、現在の石窟は惨憺たる状況といえる。従って、重要となる様式研究は、どうしても消極的になりやすく、破壊以前の先学に頼る部分が多く出てくる。

本稿では、天龍山石窟における北齊窟の重要性に着目し、先学の意見も踏まえた上で、北齊窟と称される第一窟、第十窟、第十六窟の造営年代について検討する。そして、天龍山石窟における北齊窟の意義について、あらためて見直したいと思う。

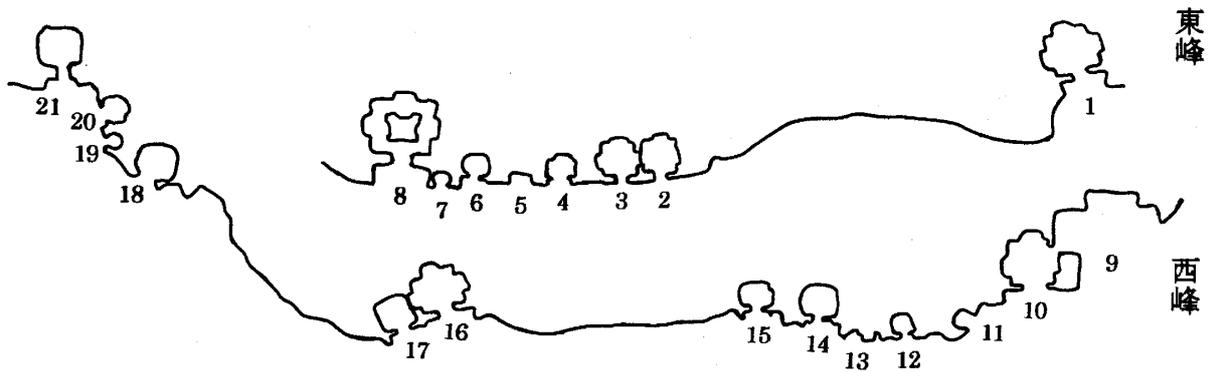


図1 天龍山石窟諸窟平面図

一 窟の概要

天龍山石窟は、市街から西南約四十キロに位置する。標高約千五百メートルの天龍山東西峰の岩壁に、合計二十四の窟が穿たれており、その内第一から第二十一までが番号を有する。^(図1) 大半の窟が南面で北壁を奥壁とし、ほぼ方形の三壁三龕に三尊、五尊を配する形が多い。^(注1) 但し、第八窟は中心に柱を立てる方柱窟、第九窟は二層式で、上層に大仏倚像、下層に十一面観音菩薩立像等を置くといった、他とは大きく異なる構造も見られる。本稿で取り上げる第一窟、第十窟、第十六窟の最も顕著な共通点は、前廊を設け、門口の外側に木造建築を模した軒組をつけることである。^(図2) これは、隋開皇四年



図2 第1窟門

(五八四) 銘をもつ第八窟にも見られる特徴で、北魏時代の石窟寺院の系統を受け継いだものと思われる。これら三窟の概況について、破壊された現状も含め、以下述べていきたい。

(第一窟)

第一窟は、第二窟・第三窟から三十メートルほど離れた東峰の最東端に位置する。前述したように前廊を設け、その上部には人字束を嵌めた軒組をつくる。当初は二本の八角柱を立てていたようだが、今はともに失われている。窟の門口には、尖拱形のアーチに左右壁柱が彫り出され、柱頭に蓮華を配する。その上に鳳凰をのせていたようだが、現在はこれも欠失する。

内部は一辺約三メートルの正方形で、四方を囲む須弥壇をつくり、その上に仏像を配する。^(図3) 東西北壁に彫られた龕は、門口と同じく尖拱形のアーチを刻み、両側には蓮華柱頭の柱、その上に鳥もしくは龍をのせる。

北壁の龕の中心には、施無畏・与願印の仏倚像を置くが、頭と両腕は欠失、表面も風化によって不鮮明である。大規模な盗掘以前の写真では、膝下が全て土砂で埋まっているが、^(注3) 現在は取り除かれ、足下に獅子、神王像らしき姿が見える。なお、中尊が坐る

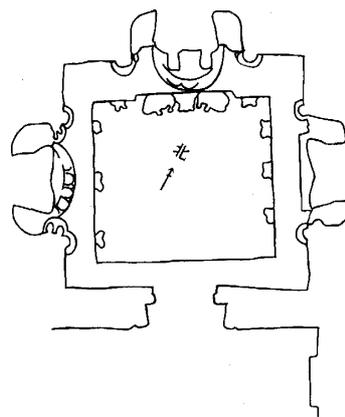


図3 第1窟平面図



図4 第1窟西壁中尊

台座の両側に、直径二十七センチほどの穴が空けられており、当初はそこに丸彫りの弟子像を立て、二菩薩二弟子を配する五尊像だったとの報告がある。^(注4)

西壁の龕内には、左右に菩薩立像、中央に施無畏・

与願印を結ぶ仏坐像を配する。中尊の頭と両手は、やはり失われているが、北壁に比べれば体躯の大部分が遺存している。^(図4)全体が円筒形に近く、肩の張った肉身の上に、やや厚めの衣を纏

い、胸前で內衣を結ぶ帯を垂下させる。中尊の坐す蓮華座は、膨らみのある蓮弁を受花とし、反花へと続く中台は、中央でくびれている。

北壁同様、中尊両側には、やはり穴が空けられている。

なお、東壁も西壁とほぼ同形式であるが、中尊が宣字形台座に坐す点が異なり、腹から下も殆ど摩滅している。

(第十窟)

第十窟は高所にあり、通常梯子を架けなければ登れない場所に位置するが、現在、第九窟と境になる東壁に、通路用の穴が空け

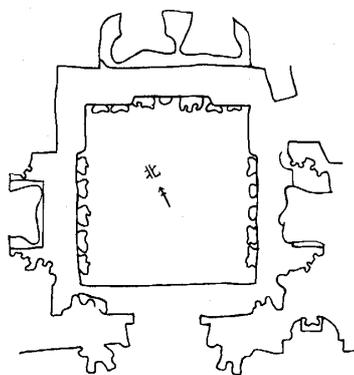


図5 第10窟平面図



図6 第10窟東壁中尊



図7 第10窟東壁中尊菩薩像頭部 (東京 根津美術館)

られており、そこから中に入る事ができる。門外には第一窟と同様、前廊、及び軒組をつくり、両側に八角の柱を立てるが、今は西側一本のみを残す。

また、門口左右には仁王像を配するが、西側は表面を削り取られ、原形を全く留めていない。東側の像は、上半身を中心に、比較的よく残っている。

窟内は、第一窟とほぼ同じ大きさで、やはり東西北壁に一龕ずつを穿つ。^(図5)

この窟は盗掘による被害のみならず、風化による摩滅も進んでいるため、保存状態が頗る悪い。北壁には二仏並坐像を、東壁には交脚菩薩像を中尊とした五尊像を、西壁に

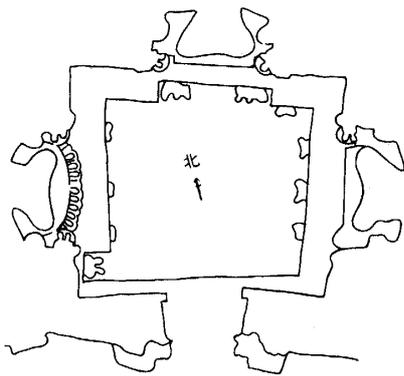


図8 第16窟平面図

内部の仏像の保存状況も、他の窟に比べれば良好である。大きさや形式は、第一窟・第十窟とほぼ同じで、やはり四方を囲む須弥壇を

の殆どが風化に侵されているものの、数文字は判読できるといふ。^(注6)

は仏坐像を中心に、やはり五尊像を配する。いずれも細部の造形は不鮮明であるが、二仏並坐像や交脚菩薩像は、天龍山石窟中、他に例を見ない珍しい図像である。また、現在は失われているが、西壁中尊の如来像は螺髪をつけており、^(注5)第一窟の諸像とは異なる点が目される。

第一窟と同様、四方には須弥壇が設けられ、その前面に、東西壁に各五体の奏楽天人像、北壁には二体の獅子と四体の奏楽天人像を彫出する。なお、南壁となる門の左右に天部像が配されていたが、現在は削り取られている。

(第十六窟)

第十六窟も、拝観用の小道から、約六メートルほどの高所に位置する。第一窟・第十窟と同様、門の外には軒組をつくり、柱を立てるが、立地条件からか、第一窟・第十窟よりも割合保存状態がよい。門口左右には、かつて仁王像があつたが、今は剥ぎ取られて形跡のみを残す。また、前廊西壁には螭首の碑形があり、そ



図10 第16窟西壁中尊台座

二壁とは異なっている。蓮華座は第一窟西壁のものと類似しているが、中台の形や受花・反花の膨らみなど、細かい部分に形の相違が見られる。^(図10) また、壁が薄く、第十七窟との境には、穴が空いている。

西壁も五尊形式で、中尊が蓮華座に坐す点だが、他の



図9 第16窟東壁中尊

東壁の龕内も北窟と同様、五尊形式である。中尊の右手は、指先が欠けているものの、施無畏印を結ぶ掌が残っており、天龍山石窟中でも貴重な遺存部分といえる。^(図9)

北壁の龕には、宣字形台座に右足を上にした如来像が結跏趺坐する。頭と両腕は欠けているが、胸から膝の辺りはよく残っており、陰刻された衣文線も鮮明である。左右両側には、二弟子二菩薩像を配するが、ともに頭部は剥ぎ取られている。^(図8)

第十六窟の各中尊は、みな右肩を露にした偏袒右肩で、体軀に密着した薄い衣を纏う。また、中尊の如来像が、みな螺髪をつけることもこの窟の特徴で、造像形式は第一窟の諸像と随分異なる。^(注7)

なお、四方の壁は、後世の彩色がよく残っており、南壁には仏の説法図が描かれているのが見える。下方に供養者を配することから礼仏図とし、原作を北斉とする見解もあるため、^(注8)非常に興味深い。天井には八葉の蓮華に三体の飛天を浮き彫りするが、現在は失われている。

二 造営年代の諸説

大正七年（一九一八）六月、わが国の建築学者、関野貞氏が天龍山石窟の現地調査をおこない、石窟の存在を初めて紹介すると、^(注9)研究者や美術家が続々と当地を訪れ、写真集や報告書、論文などを発表した。^(注10)本稿で取り上げる三窟の造営年代について、それほど多くの考察があるとはいえないが、それぞれの窟についてどのような見解があるか、次に整理してみたい。

（第一窟）

第一窟の発見は、関野貞氏ではなく、その四年後に訪れた田中俊逸氏による。但し、発表された報告書では、第一窟の造営年代に触れることはなく、窟の概況を報告するのみにとどめている。^(注11)

第一窟の造営年代について、最初に見解を出したのは小野玄妙氏であるが、ただ「東峯の第一窟及び第八窟が隋時代の作である」

とし、さらに「北齊時代隋時代などと強て時代別を立つることは、大に考へ物であつて、今此の場合には決して嚴密な意味の時代區分を爲すべきではない」と、積極的には言及されていない。^(注12)

また、オズヴァルト・シレンも、第一窟から第三窟、第十窟、第十六窟を一括りに北斉とするが、窟の前後関係や具体的な年代についてはやはり述べていない。^(注13)

シレン以降、第一窟は北斉窟としてほぼ定着したように思われたが、水野清一氏は小野玄妙氏と同様、隋説を唱えられた。その根拠となったのは、門口東側の碑文中に開皇云々の文字を発見されたことで、さらに「佛像は一般の隋佛に一致し、第八洞方柱の諸尊にもちかい。やはり隋代の造建といふべきであらう」と様式からも判断を下している。だが、現在碑に刻まれた文字は摩滅しており、全く判読することができず確かめる術は無い。なお、この碑文の文字に対し、李裕群氏は「唯常法門開辟（樂？）□□□山愿登」の字がみえるとし、水野清一氏が「開皇」と「開辟」を誤読したのではないかと指摘している。^(注14)

水野清一氏が隋としたのに対し、シカゴ大学のヴァンダースタッペンとマリリン・リーは、北齊説を唱える。中でも、第一窟は北齊窟の中でも最も早い造営とし、五六〇年という具体的な数字を提示された。^(注15)なお、山本智教氏も同様、皇建年間（五六〇）頃の開鑿と推定されている。^(注16)

皇建年間よりもさらに早い造営と考えられたのが、李裕群氏である。李裕群氏は、『嘉靖太原縣志』や『太原志・太原府』等の地誌に、天保二年（五五一）、天龍山に仙巖寺が建てられたと記載さ

れていることに着目し、第十窟、第十六窟との位置関係も考慮しながら、東峰の第一窟は仙巖寺と関係、上限を東魏末とし、天保二年頃の開鑿と述べられた。^(注18) なお、これらの文献史料については、後述で触れることとする。

(第十窟)

第十窟については、概況で述べたように、窟の保存状態の問題もあり、造営年代に関する言及は、それほど多いとはいえない。関野貞氏が最初に「北齊時に成りし重要な石窟」^(注19)と述べられてから、北齊の開鑿と認識はされてきたが、さらに具体的な年代を小野玄妙氏が提示された。

前掲『嘉靖太原縣志』、及び『太原志・太原府』の「寺觀」条には、天保二年に仙巖寺が創建されたこと以外に、皇建年間、天龍寺が建立された記事がある。両寺が天龍山石窟の造営に大きく関係すると指摘した小野玄妙氏は、仙巖寺を西峰にあつたとし、第九窟・第十窟・第十六窟がそれにあたると考えられた。従って、開鑿年代は天保二年としている（但し、第十六窟はやや遅れて造営されたことも指摘）。

一方、年代をさらに下げる考え方も出てくる。常盤大定氏は「今窟内の佛菩薩・羅漢等の像を見るに、其形式第二窟・第三窟の者と、多少性質を異にし、寧ろ第八窟の者に近きにより、隋時の開鑿に成れる者と判定する方、寧ろ妥當なるべし」^(注20)とし、造営年代を隋とした。

小野玄妙氏が、第十窟を天保二年建立の仙巖寺に比定したのに

対し、李裕群氏は皇建年間創建の天龍寺を第十六窟とし、同じ様式を見せる第十窟も同年代の開鑿と推定した。^(注21) なお、様式から検討したヴァンダースタッペン、マリリン・リーは、それより十年遅れる五七〇年頃と判断している。^(注22)

(第十六窟)

第十六窟の諸像は、天龍山石窟全体の中でも比較的保存状態がよく、しかも造形的にも優れていることから、作品としての評価も高い。造営年代としては、北齊の中でも中期から末期とする見解が多く、造像様式における第十窟との共通点も注目される。^(注23)

この窟については、シレンは北齊の末期、もしくは隋とし、^(注24)常盤大定氏にしても第十窟とともに隋としている。螺髪や衣の形式などから判断した山本智教氏も「570年代つまり北齊末期」とし、「第1窟第2窟よりもおそく、第8窟の隋式に近ずいている」と、^(注25)ほぼ同時期の年代を推定している。

これらの意見に対し、李裕群氏は、前述のように第十六窟が天龍寺にあたるとし、皇建年間、つまり北齊でも盛期の造営と見なす。そして、寺の創建と石窟は全くイコールとはいえないが、石窟の開鑿と何らかの関係があることを主張、第十窟との共通点を提示し、両者の年代が接近することを述べている。^(注26)

なお、第一窟・第十窟・第十六窟造営年代の主な見解については、別表にまとめたので、そちらもご参照いただきたい。

三 様式について

(別表)

第1窟・第10窟・第16窟造営年代の主な見解(諸家別)

| 研究者名 | 第1窟 | 第10窟 | 第16窟 | 主な論文・書籍等 |
|----------------------------------|-----------------|----------------------|-----------------|---|
| 関野 貞 | | 北齊 | 北齊 | 「西遊雑信 上」(『建築雑誌』32巻384号、1918年)。 「天龍山石窟」(『國華』375号、1921年)。 |
| 田中俊逸 | 北齊 | 北齊 | 北齊 | 「天龍山石窟調査報告」(『佛教学雑誌』3巻4号、1922年)。「天龍山石窟探險思ひ出の記」上、下(『日本美術協会報告』23、24号、1932年)。 |
| 小野玄妙 | 隋 | 北齊、天保2年(551)、第9窟と同時期 | 北齊、第10窟よりもやや後れる | 「天龍山石窟諸像の製作年代」(『無礙光』19巻4号、1923年)。 |
| Osvald Sirén | 北齊 | 北齊 | 北齊末期 | <i>Chinese Sculpture from the fifth to the fourteenth century</i> vol. I ~ IV, LONDON (1925). |
| 常盤大定 | 北齊 | 隋 | 隋 | 『支那佛教史蹟』第3集(佛教史蹟研究会編、1926年。関野貞との共著。後に復刻版として『支那文化史蹟』8巻、法蔵館、1940年を發行)。 |
| 山中定次郎 | 北齊 | 北齊、最も進歩した様式、第9窟と同時期 | 北齊盛時 | 「山西省天龍山佛蹟石窟踏査記」(『山中定次郎翁傳』故山中定次郎翁伝編纂会編、1939年)。 |
| 水野清一 | 隋 | 北齊 | 北齊 | 「天龍山石窟」(『山西古蹟志』京都大学人文科学研究所研究報告、1956年。日比野丈夫との共著)。 |
| 山本智教 | 北齊、560年頃 | 北齊、560年頃 | 北齊、570年代 | 「天龍山石窟」(『密教文化』55号、1961年)。 |
| HARRY VANDERSTAPPEN・MARYLIN RHIE | 北齊、皇建年間(560) | 北齊、570年代 | 北齊、570年代 | “THE SCULPTURE OF TIEN LUNG SHAN : RECONSTRUCTION AND DATING” <i>ARTIBUS ASIAE</i> 27-3 (1965). |
| 北野正男 | 北齊に着手、隋に完成 | 北齊 | 北齊 | 「石窟寺院とその造像」(『六朝の美術』平凡社、1976年)。 |
| 閻文儒 | 北齊 | 北齊 | 隋 | 「天龍山石窟」『井州文化』9・10期(1981年。閻万石との共著)。「第二章 中国石窟分布的地区」(『中国石窟芸術総論』天津古籍出版社、1987年)。 |
| 丁明夷 | 東魏 | 北齊 | 北齊、皇建年間(560) | 『中国美術全集 彫塑編13 鞏県・天龍山・響堂山・安陽』(文物出版社、1989年。陳明達との共編)、『中国石窟彫塑全集6 北方六省』(重慶出版社、2001年)。 |
| 李裕群 | 北齊、天保2年(551) | 北齊、皇建年間(560) | 北齊、皇建年間(560) | 「天龍山石窟分期研究」(『考古学報』1992年1期)、『天龍山石窟』(科学出版社、2003年。李鋼との共著)。「二 太原附近諸石窟」(『北朝晚期石窟寺研究』文物出版社、2003年)。 |
| 安田治樹 | 隋、開皇年間(581~600) | 北齊 | 北齊 | 『根津美術館列品図録 美術編』(根津美術館、改訂6版1983年)、『仏教の彫刻—中国 根津美術館蔵シリーズ17』(根津美術館、1994年)。 |
| 藤岡 穰 | 北齊 | 北齊後半期、第16窟よりも遅れる | 北齊 | 「〔総説〕中国の石仏」(『中国の石仏 莊嚴なる祈り』大阪市立美術館、1995年)。 |
| 久野美樹 | | 北齊 | 北齊 | 『中国の仏教美術—後漢代から元代まで』(東信堂、1999年)。 |
| 岡田 健 | 北齊 | 北齊 | 北齊 | 「南北朝後期仏教美術の諸相」(『世界美術全集 東洋編3 三国・南北朝』小学館、2000年)。 |
| 孫迪 | 北齊 | 北齊 | 北齊 | 『天龍山石窟 流失海外石刻造像研究』(外文出版社、2004年)。 |

従来は、三窟諸像の様式に見られる共通点から、第一窟と第十窟、もしくは第十窟と第十六窟を組み合わせ、それらをほぼ同年代とする考え方に大方絞られる。窟全体は、三窟ともに同形式で、北齊という時代の枠組みから大きくはみ出ることには無いと思われるが、細かく分けた場合、第一窟と第十六窟との間に様式上の差異が見られるため、それらが造営年代に隔たりを感じさせる。

三窟の前後関係に対する主な見解は、

第一窟 ↓ 第十窟・第十六窟

第一窟・第十窟 ↓ 第十六窟

第十窟・第十六窟 ↓ 第一窟

と大別することができるが、ここで注目したいのは、第一窟の造営年代で、第十窟・第十六窟よりも先行するか遅れるかが、大きな鍵になるといふことである。

第一窟の諸像、特に如来像は、低く平らな肉髻をつけ、螺髪を一切表さない素髪が特徴である。^(注27) 体軀は比較的肉づきがよく、衣はやや厚めであるが、東魏、乃至は北齊初頭の造営と考えられている第二窟、第三窟の諸像と比べるとかなり薄く、龕の形式も異なるため、年代の開きを感じさせる。

一方、隋開皇四年の紀年銘をもつ第八窟と比較すると、螺髪のない低い肉髻やずんぐりした体軀、衣の表現などに共通点が見受けられ、目尻が吊り上がった切れ長の目も、第八窟東壁南側の菩薩像頭部（現在東京国立博物館所蔵）などに見ることができるといえる。

このような、第一窟と類似する様式は、天龍山石窟からほど近い、龍山の姑姑洞石窟や縣甕山瓦窯村石窟の諸像にも見られる。^(注28)

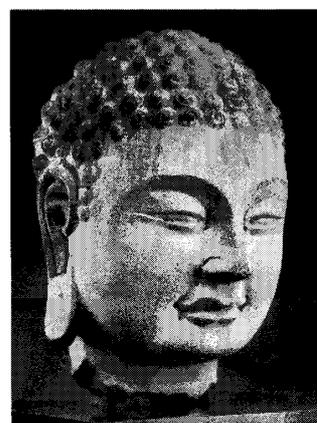


図11 第16窟東壁中尊如来像頭部
(東京 根津美術館)

に開かれた可能性が強いと思われる。姑姑洞石窟下窟諸像との共通点を考えると、第一窟は北齊初期、中期とするよりも、むしろ末期から隋にかけての様式を踏襲しているといえそうである。

第十窟の西壁像、第十六窟各壁の中尊は、腰のくびれた体軀に、貼り付くような偏袒右肩の薄い衣を纏い、境界線の無いなだらかな肉髻、螺髪をつけることが特徴的である。特に第十六窟の中尊のような、丸々とした張りのある顔にやや見開いた目、幅広く厚みのある唇は、第一窟と大きく異なるもので、^(図11) しかも太原附近にある北齊期の石窟諸像とも一線を画するものと見なすべきだと思われる。^(注29) 第十窟・第十六窟については、外来様式の受容を指摘する意見があり、^(注30) また、北齊の鄴都附近では、南朝の梁を介して、 Gupta 様式を取り入れていたとの見解もあるため、^(注30) 別都晋陽にほど近い、天龍山石窟のこれら二窟に表れる様式も、少なからずその影響を受けていたと考えられよう。北齊の要素を随所に見せるとはいえず、独特の造像様式に感じられるのは、第一窟の造営とは異なる影響を受けた制作者が携わった可能性もある。なお、第十窟諸像は第一窟諸像との共通点もかなり見られることから、第一窟、第

両石窟の開鑿も北齊と考えられ、特に姑姑洞石窟の下窟は、天龍山石窟の第八窟と同様の方柱窟であることから、両者の接近した地理条件を踏まえると、隋に近い北齊末期

十六窟の中間に位置すると考えられる。

四 造営年代

北魏末期、高歡が爾朱氏を打ち、晋陽（山西省太原の西南）に大丞相府を置く。さらに都を鄴（河北省臨漳県）へ遷し、孝静帝を擁立、北魏は東西に分裂し東魏が建国された。高歡が没すると、その長子高澄が実権を握るが、梁の降人蘭京に殺されると弟の高洋がその後を次ぎ、混乱した政権を立て直す。やがて孝静帝を廃した高洋は自らを文宣帝とし、北齊の第一皇帝の位についた。

暴君としても知られる文宣帝であったが、幼い頃から仏教への恭敬が篤く、鄴都から数十キロメートル離れた龍山に、雲門寺を建立し僧稠を住せしめたり、鼓山石窟寺（響堂山石窟）を開くなど、仏教推進政策をとっていた。雲門寺の建立は、文宣帝即位後の三年、天保三年（五五二）の建立で、鼓山石窟寺もまた、それに近い頃だと考えられている。その他、若き文宣帝は沙門を招き、各地に多くの仏教寺院を建立したことが知られている。^(注31)

ところで、小野玄妙氏や李裕群氏等が着目された天龍山の仙巖寺については、前掲『嘉靖太原縣志』巻一「寺觀」条が、「仙巖寺、在縣西南三十里葦谷山。北齊天保二年建爲避暑宮賜名。」^(注32)『太原志・太原府』「寺觀」条にも「仙巖寺、在縣西南三十里、北齊避暑之宮。」^(注33)と記している。これらの記載から、天保二年に建てられた文宣帝の避暑宮が、すなわち仙巖寺と見なされ、しかも天龍山にあったと考えられている。

同じく天龍山にあったという天龍寺については、やはり前掲『嘉靖太原縣志』巻一「寺觀」条に、「天龍寺、在縣西南三十里、王索西都、北齊皇建元年、建内有石室二十四龕石佛四尊、及隋開皇間碑刻石室銘。寺東一里餘、鑿壁爲池、有天龍廟」^(注34)という記事があり、また同じく前掲『太原志・太原府』「寺觀」条に「天龍寺、在本縣西南三十里、北齊置、有皇建中并州定國寺僧造石窟。」^(注35)とあることから、皇建年間に創建された、すなわち天龍山石窟といわれている。

これらの文献史料から、天龍山では天保二年に仙巖寺が、皇建年間に天龍寺が建立されたことがわかる。前述したように、李裕群氏は仙巖寺を東峰の第一窟に、天龍寺を西峰にある第十六窟にあたと述べられた。だが、第一窟の様式を考えると、天保二年の開鑿は聊か早すぎるかのように思える。推測ではあるが、むしろ仙巖寺は、東魏の開鑿と考えられる第二窟・第三窟にあてるほうが適當ではないだろうか。^(注36)天保二年は東魏末年からわずか二年しか経っておらず、北齊初期の様式としても決して不自然ではなからう。天保年間、仏教推進に力を入れていた文宣帝が避暑宮として仙巖寺を創建し、天龍山石窟の第一期造営とされる第二窟・第三窟を開鑿したと考えたい。

一方、天龍寺はどこに位置していたと考えるべきか。現在、東峰と西峰の間に、白龍洞と呼ばれる湧水池があるが、その附近を『嘉靖太原縣志』にいう「池」、「天龍廟」とした場合、天龍寺は西峰になれば「寺東一里餘」と記すことはできない。李裕群が指摘されるように、位置的にも第十六窟がふさわしいと思われる。^(注37)

以上、第十六窟が皇建年間、第一窟は隋に近い北齊末期、そして、第十窟は、第十六窟すぐに続く造営、つまり第十六窟↓第十窟↓第一窟という仮説を提示してみた。わずか二十年にも満たない期間であるため、三窟造営の前後は実に緊密しており、年代を判定することは極めて困難なことであるが、第一窟・第十窟・第十六窟は、天龍山石窟の本格的な始まりにあたる、注目すべき窟であることから、やはり見なおすべき問題として取り上げたい。

なお、近年中国では、ソグド人との交流を示す大きな発見が相次ぎ、太原からも貴重な資料が見つかっている。この辺りで、当時多様な文化が摂取されていたことを証明するものといえよう。^(注38) 外来様式を色濃く見せる第十六窟もまた、恐らくそのような文化交流を背景に造営されたと考えられ、重要窟として改めて認識されるべきである。

まとめ

今回、天龍山以外の地区にある北齊、隋代開鑿の石窟と、十分な比較検討ができなかった。近年、山西省、河南省、河北省等に点在する小規模な石窟が注目され、六世紀半ばから七世紀初頭にかけての造像様式が明らかになりつつあるといえる。とはいえ、天龍山石窟の諸像と比較検討をするには、地域性も念頭に置いた上で、さらにデリケートな考察が必要となるであろう。これらについては今後の課題とし、慎重に吟味したいと思う。

注

- 1 李裕群・李鋼『天龍山石窟』（科学出版社、二〇〇三年）では、各窟の詳細な分類を試みている。
- 2 唐の開鑿ではあるが、第六窟の門口上にも小規模な軒組が造られている。
- 3 外村太治郎・平田饒『天龍山石窟』金尾文淵堂、一九二二年、第三図。
- 4 (前掲) 李裕群・李鋼『天龍山石窟』。
- 5 (前掲) 外村太治郎・平田饒『天龍山石窟』、第四十九図。
- 6 田村節子「天龍山石窟第十六窟・第十七窟について」(『仏教芸術』一四五号、一九八二年)。
- 7 (前掲) 外村太治郎・平田饒『天龍山石窟』、第三図、第五図、第六十二図、第六十四図。
- 8 (前掲) 李裕群・李鋼『天龍山石窟』。
- 9 関野貞「西遊雑信 上」(『建築雑誌』三八四号、一九一八年)。後に『支那の建築と芸術』(岩波書店、一九三八年)に所収。
- 10 天龍山石窟の研究史については、拙稿「天龍山石窟の研究―研究史と問題点―」(『愛知県立芸術大学紀要』三四卷、二〇〇五年)を参照。
- 11 田中俊逸「天龍山石窟調査報告」(『佛教学雑誌』三卷四号、一九二二年)。田中氏は、後に「天龍山石窟思ひ出の記」上(『日本美術協会報告』二三号、一九三三年)で、第一窟を北齊の造営としている。
- 12 小野玄妙「天龍山石窟諸像の製作年代」(『無礙光』一九卷四号、一九三三年)。
- 13 Osvald Siren, *Chinese Sculpture*, LONDON, 1925.
- 14 水野清一「天龍山石窟」(『山西古蹟志』京都大学人文科学研究所研

- 究報告、一九五六年)。
- 15 李裕群「天龍山石窟調査報告」(『文物』一九九一年第一期)。
- 16 Harry Vanderstappen and Maryline Rhie "The Sculpture of T'ien Lung Shan : Reconstruction and Dating" ARTIBUS ASIAE, vol. XXVII—3, 1965.
- 17 山本智教「天龍山石窟」(『密教文化』五五号、一九六一年)。
- 18 仙巖寺が東峰に建立されたとする説は、早くに小野玄妙氏が説かれているが(「天龍山石窟造像攷」『佛教学雑誌』卷三第五号、一九二二年)、それは第一窟ではなく、第二窟・第三窟にあたると思われる。但し、後に仙巖寺は西峰にあったと訂正された(前掲「天龍山石窟の製作年代」)。
- 19 (前掲) 関野貞「西遊雜信上」。
- 20 常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第三集(評解)、佛教史蹟研究會、一九二六年。
- 21 (前掲) 李裕群・李鋼『天龍山石窟』。
- 22 (前掲) Harry Vanderstappen and Maryline Rhie "The Sculpture of T'ien Lung Shan : Reconstruction and Dating"
- 23 (前掲) Osvald Siren, *Chinese Sculpture*
- 24 (前掲) 常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第三集(評解)。
- 25 (前掲) 山本智教「天龍山石窟」。
- 26 (前掲) 李裕群・李鋼『天龍山石窟』。
- 27 (前掲) 外村太治郎・平田饒『天龍山石窟』。
- 28 (前掲) 李裕群・李鋼『天龍山石窟』。李裕群氏は瓦窯村石窟の東窟中窟、西窟↓天龍山石窟第一窟、第十窟、第十六窟↓姑姑洞石窟の下窟、中窟、上窟とし、その年代を東魏武定中(武定四年・五四六)から北齊末(隆化元年・五七六)としている。
- 29 松原三郎「隋造像様式成立考—とくに北周廢仏と関連して—」(『美術研究』二八八号、一九七三年)。
- 30 岡田健「北齊様式の成立とその特質」(『仏教芸術』一五九号、一九八五年)。
- 31 諏訪義純「北齊文宣帝とその仏教信仰—北齊佛教の一考察(一)—」(『大谷學報』一六六号、一九六六年)。
- 32 『天一閣藏明代方志選刊』八(上海古籍書店、一九八一年)。
- 33 『永樂大典』卷五一九九—五二〇五、第三四冊(世界書局、台北、一九六二年)。
- 34 (前掲) 『天一閣藏明代方志選刊』八。
- 35 (前掲) 『永樂大典』卷五一九九—五二〇五、第三四冊。なお、同書「宮室」条には「避暑宮、在本縣西南三十里天龍寺東址、有重岡數畝。昔北齊高帝及東魏文宣帝避暑離宮。」と見える。
- 36 但し、高歡が晋陽で実権をにぎっていた永熙三年(五三五)から武定五年(五四七)、天龍山では避暑宮が造営されたといわれている(「大漢英武皇帝新建天龍寺千仏樓碑」)。それを、第二窟・第三窟にある説もあるため、さらに吟味が必要であると考ええる。
- 37 (前掲) 李裕群・李鋼『天龍山石窟』。『中国美術全集 彫塑編一三 鞏県・天龍山・響堂山・安陽』(文物出版社、一九八九年)は、第十六窟門口外にある碑文上に「皇建」の文字があつたと記す。
- 38 一九九九年、太原の晋祠近くで虞弘墓が発掘され、そこから発見された石槨の画像は、明らかにソグド系であつたという(曾布川寛「漢

唐期の東西南北の文化交流」、展覧会図録『中国☆美の十字路展』森
美術館・MIHO MUSEUM・九州国立博物館・東北歴史博物館
二〇〇五〜〇六年）。

(付記)

挿図として掲載した図2、図6は、本学美術学部佐藤勲教授、図7、
図11は根津美術館よりご提供いただきました。末筆ではありませんが、
ここに感謝申し上げます。また、図1、図3、図5、図8は筆者が作
成（参考・李裕群・李鋼『天龍山石窟』、図4、図9、図10は筆者が
撮影したものを使用しました）。